

平成13年2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

ひな人形いろいろ

どの国にも人形はありますが、「おひなさま」とよばれ「ひなまつり」という国民的行事となつて伝統的に伝えられているのは、日本だけです。ひな人形の起こりは、平安時代までさかのぼり、天児（あまがつ）、這子（ほうこ）などとして、幼児の枕元に置き身の汚れや災いを払うことに使われました。室町時代に入って公家などの間で「ひひな遊び」が盛んとなり、現在のものは、その延長線上にあります。「流し雛」などに見られる男雛が袖を広げて立ち、女雛が筒状のものは、天児、這子の名残をとどめています。

わが家に昭和30年代まで、おかっぱ頭の大きなひな人形がありました。母か祖母のもので、なぜかおかっぱの女の子が、袴を着て座っているもので、長いこと不思議に思っていました。先日、越生の^{てきほ}笛畝人形美術館を訪ね、謎が氷解しました。この人形は、「かみしも雛」といい、文化・文政（1804～1830年）のころ橋本重平衛という人が考案し、主に岩槻、鴻巣で製造、販売されたものでした。母も祖母も上成木の出身なので、岩槻方面から入ってきたものと思われます。館長に「なぜ女の子が、袴を着ているのですか」と問うと「あれは、男の子ですよ」といわれた。女の子の人形もないわけではないが、ほとんどが男の子なのだそうです。その訳は、「女の子が生まれ、初節句に親類から贈られるもので、将来、いいお婿さんに恵まれますようにという願いが込められたもの」だったのです。また、江戸などの大都市より周辺の田舎で多く見られたようです。柚木地区の老人会の方々に聞いてみると、ほとんどの方が知っていました。しかし、みなさん、もうぼろぼろになって処分されているようでした。現在、このかみしも雛は、作る人がいなくなり、幻の雛となりつつあります。

一方、このような雛とは区別される「郷土雛」があります。江戸期、豪華なひな人形を持っているのは、大都市の武家か裕福な商家の家の子供だけでした。しかし、ひな人形の魅力は、地方や貧しい人々にも抗し難いものだったに違いありません。都会型とは違う、それぞれの土地で手に入る材料（反故紙、土、木、糸など）で工夫をこらし、個性豊かなひな人形が生まれていきました。麻糸を使った薩摩の糸雛、吉野の桜の一刀彫雛、信州の押し絵雛、東北地方の土雛などなど。でも、その土地の匂いと情緒ただよう愛らしいひな人形です。

「村の嫁今戸のでく（人形）でひなまつり」という句があります。江戸の今戸焼きの土雛で、近在や貧しい子女に愛されました。一文雛とよばれ、手のひらに乗るほどの素朴なものです。青梅地方で「おひなさま草」とよばれる草があります。ノカンゾウのことで、伸び始めた茎を引き抜き、白いところを2～3センチメートルに切って頭とし、葉っぱをまわして胴体を作り、それに着物のように葉っぱを巻いたものです。ノカンゾウの若芽は、それだけでも十二^{ひとえ}単の襟元を思わせます。

菜の花雛は、花を頭に葉っぱを衣にして、赤い糸で縛って作りました。また、柿の葉を真ん中から折って、茎を頭にした柿の葉雛というものもあるそうです。(杉田ナカ談)日本人が、おひな様に寄せる思いは、世界でも類をみないほど広く深いのかもしれません。

(文責 小川 秋子)